会報 特攻

平成5年8月

第17号

〒105 東京都港区虎ノ門
3―6―8 第6森ビル
特攻隊慰霊顕彰会
特攻平和観音奉賛会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 最上貞雄

第十五回目になる本年の特攻隊合同慰霊祭は、会務の都合で例年より遅くなったが、6月26日に靖國神社で行はれた。

瀬島会長は海外出張不在のため田中耕二副会長が祭主を勤めた。

参集者は遺族74名、来賓22名、戦友299名だった。戦友は年々確実に年老いてゆくので、この行事を永続させるには若い後継者が必要であるし、それが為には法人化して会の基盤を固めることが急務である。

神事及び靖国会館における直会は例年通り行はれた。

目次

特攻合同慰霊祭……1
田所昇兄の遺書……5
特攻隊員の手記……9
富嶽特攻隊の出撃……12
飛燕・高島隊……14
黒潮に逝く……17
読谷飛行場跡に立ち……20
特攻随想②……22
特攻艦隊留魂碑の碑文……24
〈慰霊祭〉
知覧特攻観音4　回天8　㋹13
特潜16　震洋24　万世24
「特別攻撃隊」名簿の追加訂正……8

明治の帝の勅　承けて築きしこの社
斎き祀りし神々の　御前額突く鬢白し
庭の梢に咲いて会おと　誓いし友は神あがり
匂うが如き若武者の　永久に変らぬ軍神
手拍子とりて歌いたる　友が横顔憶いつゝ
我が柏手は奥宮に　軍歌の響きと届けまし
お国の為ということの　絶えて久しき戦後史に
既倒に廻らすこの祭　老兵の正気なお存す

当日雨天にも拘らず参集所一杯になった参列者

参列者に挨拶する田中副会長

祭　文

第十五回特攻隊合同慰霊祭に当たり謹んで特攻殉国の烈士の御霊に申し上げます。

国運を賭けての戦であった大東亜戦争に於て英霊の皆様には当時弱冠十七・八歳から二十歳代の春秋に富むお年であられながら国難打開の為に肉親の恩愛を断ち切って特別攻撃を敢行され身命を祖国に捧げ決然として散華されました。

当時皆様の誠忠遺烈により全軍将兵の闘魂烈々として燃え上り総べての国民は深く深く感動致しました。連合軍に於てもこの世界戦史に未だ見ざる日本民族の闘魂に驚愕多大の衝撃を受けたのであります。然しながら彼我の戦力隔絶し戦勢日に非にして遂に終戦を迎えたのであります。

終戦より正に四十八年祖国日本は今や空前の復興発展を遂げましたことは之全く英霊皆様のご加護によるものであり私どもは一日も忘れることは出来ません。

本会は今後とも特攻烈士の御遺績を広く国民に知って頂きこの史実を正しく後世に伝えることが出来ますようあらゆる努力を致す所存で御座います。本日ここに御遺族の方々始め関係者相集い在天の英霊に深く敬弔の誠を捧げます。

平成五年六月二十六日

特攻隊慰霊顕彰会会長　瀬島　龍三

代理　副会長　田中　耕二

献　吟

吟詠　武田　城竜

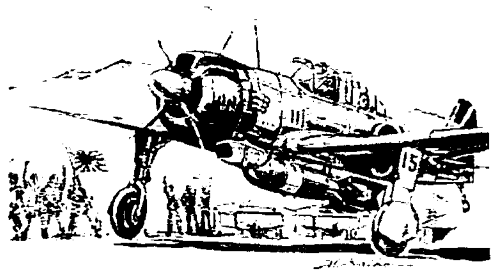
作詩　永野　秋水

噫特攻

風蕭々月半輪煌　太白中天烏々蒼
運命定茲空決戦　敢然当敵艦動芳
紅顔痛未桜花蕾　今夕又翔求巨艟
飛燕不帰無限思　英魂鎮此張霊光

鹿屋海軍特攻基地忠霊塔

今日も亦　黒潮躍る海洋に
飛び立ち行きし　友は帰らず



少飛会　海法　秀一　画

御参列御遺族と御祭神名

〈氏 名〉	〈御祭神〉	〈続柄〉	〈出身〉
荒谷 昇	荒谷 猛	弟	陸士57期
荒木しげ子	荒木 春雄	妻	陸士57期
相川 哲夫	相川 清司		特操1期
飯田佐次郎	西尾常三郎	兄	陸士50期
市原 隆夫	市原 哲雄	兄	陸士57期
石塚 昌子	石塚糠四郎	義姉	特操2期
井樋 典弘	井樋 太郎	弟	陸士57期
伊従 秀夫	関口 剛史	義弟	甲飛13期
内海みつ子	内海京一郎	妹	特操2期
大里あき子	藤井 一	妹	少候21期
ほか6名			
大井 栄三	大井 隆夫	弟	陸士57期
岡山よし子	岡山 勝実	妹	操学
ほか1名			
小栗 楓子	林 義則	許婚者	幹候9期
片山 翁次	片山 悦次	兄	特操2期
ほか1名			
河井 敏男	河井 秀男	弟	少飛14期
ほか2名			
河井 芳男	河井 秀男	弟	少飛14期
ほか1名			
河村 次郎	富永 靖	義兄	特操1期
片岡 光敏	片岡 正光	弟	陸士57期
北村 昭二	北村十二郎	弟	甲飛13期
久保 愛子	久保元次郎	妹	特操1期
ほか2名			
小林 国一	小林 貞三	兄	少飛14期
ほか3名			
小林 忠彦	小林 善彦	弟	陸士54期
酒井 多け	酒井 敏夫	義姉	特操1期
ほか1名			
澤柳 蔵三	澤柳 彦士	兄	海兵71期
鈴木 俊	鈴木 次郎	弟	近歩3
曽篠 保	曽篠 裕	叔父	陸士56期
曽我 睦郎	曽我 邦夫	弟	陸士55期
高橋八重子	高橋 暐	義妹	特操1期
田崎美代子	酒井 敏夫	姉	特操1期
伊達智恵子	穴沢 利夫	許婚者	特操1期
高橋八重子	矢代 清	姉	甲飛13期
ほか1名			
筑城 はる	本谷 友雄	姉	陸軍13年
ほか1名			
津留 敦	津留 洋	兄	陸士56期
寺井 俊一	平柳 芳郎	甥	陸士57期
長嶺 清	長嶺弥三郎	甥	特操1期
ほか1名			
中村 正平	中村 憲二	弟	特操1期
馬場 はる	新井 郷治	姉	甲飛11期
福島 きん		妹	
豊田 しげ		妹	
林 克美	林 甲子郎	弟	陸士57期
安村 朝子		姉	
原田 博	原田 宣章	兄	幹候8期
深井 みよ	本谷 友雄	妹	陸軍13年
福井 寛治	福井 與一	兄	特操1期
古屋 七郎	古屋 吾朗	弟	少飛14期
本間 嘉男	本間 俊夫	兄	陸士52期
丸山 弘人	丸山 茂雄	甥	陸軍
水谷百合子	鈴木 重幸	姉	特操2期
ほか3名			
村山 公一	村山 光一	甥	少飛10期
山田 達雄	山田 鉄雄	義弟	予備学生13期
山本 卓真	山本 卓美	弟	陸士56期
山本 智子	山本 孟	姉	海兵74期
ほか1名			
山岡 礼子	岡上 直喜	妹	陸士57期
米山八重子	米山和三郎	義姉	少飛15期
横山 茂	横山 忠重	弟	海機52期
吉永 貢	林田貞一郎	知人	甲飛4期
米津 平一	米津芳太郎	兄	少候24期
渡辺 忠良	渡辺 静	弟	特操2期
ほか1名			

直会は例年通り靖国会館で行った。二階を正坐として一階と会館前の天幕に分れ、一堂に会することができないのは残念である。

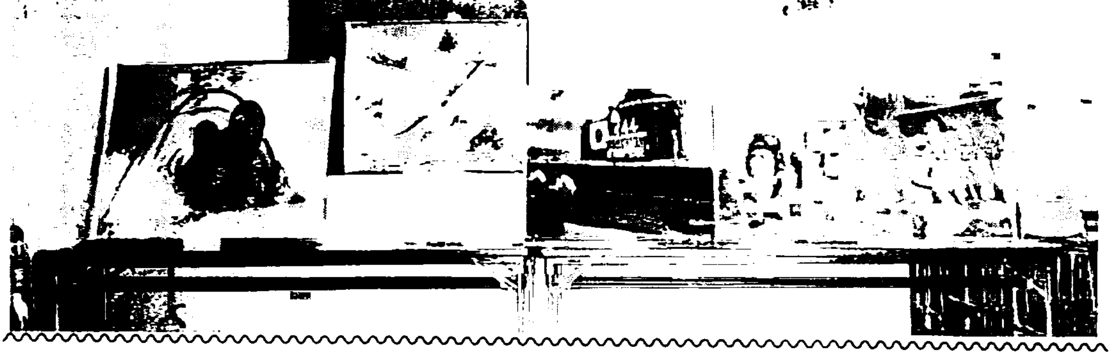
御遺族に挨拶する田中副会長

特攻絵画展

3年秋の世田谷特攻観音年次法要、4年春の靖國神社、同年の世田谷と既に三回特攻絵画展を実施している。どちらも展示場所に苦慮しているが、松本理事はじめ担当者の努力によって、今回は33点（うち肖像画は18点）を靖国会館の玄関口、階段の途中などに展示することができた。カラー印刷でないので出来栄えを紹介できないが、特攻御祭神の真の姿が表現されている。

今回の出品者は次の諸氏だった。

松本　武仁　　伊藤　直之
市川　国雄　　中野友二郎
生田　惇



知覧特攻観音慰霊祭

理事長　最上貞雄

去る5月3日例年の通り第39回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が執り行われました。

年々参拝者の数も増え、今年は千二百名を越える方々が参拝されました。

今年は話題を呼んだ鳥栖小学校のピアノと陸軍54期諸富才三氏の手製の水上機が特攻平和会館に展示されました。拝観者の累計も五百万名になんなんとしておる由、特攻の英霊もさぞかしお喜びのことと存じます。

偕行社代表　鈴木敏通氏追悼文

（一部省略）

当知覧基地での出撃前夜における地元の乙女たちとの心の交流は今も語り継がれ、英霊を祀る記念館を訪ねて当時の諸霊の心情を思い熱い涙がこみ上げるのであります。

靖國神社で頒布されている図書「父上さま母上さま」の中に昭和20年5月28日沖縄にて戦死した若尾達夫少尉の遺書があります。

「出撃の前夜、心は何時もと少しも変らぬ平静です。自分の今の心境は唯必沈あるのみです、今米鬼の攻撃を目の前に見て志気愈々旺盛なり。

最後の飛び立つ飛行場は九州の最南端知覧飛行場です。此処から六百粁飛んで沖縄に行き敵艦上に突込みます。勿論帰路のガソリンは有りません。若し敵艦が見つからなかったならば島でも敵陣地でも敵の居る処に突込む覚悟であります。

達夫は最後まで元気で御国の為に喜こんで散華して行きます。では呉々も御体大切に。達夫の分まで永生して下さい。身はたとへ愛機と共に砕くとも魂永久に国ぞ護らん。」

私の同期生91名も特攻で戦死しており、今なお皆ての友の面影が鮮やかに瞼に浮かぶのであります。当時「後に続く者を信ずる」とよく云われました。戦後日本の安全と平和を守るため自衛隊が創設され、諸英霊の精神は立派に受け継がれ今や世界の平和に貢献するまでに至っております、私も自衛隊勤務の間、沖縄への部隊配置業務のため、前後19回にわたり九州から飛行し機上から特攻で散華された皆様の霊に深い哀悼の意を表したのであります。

「かなし子にかたりきかせよ国のため
命すてにし親のいさおを」

明治天皇の御製であります。

願わくば諸霊安らかに鎮まりて日本の繁栄をお見守り下さい。

故田所　昇兄の遺書

本会理事の今井理一氏より「富丘会報」平成2年12月号に載っているこの稿の提示を受けたので、ここに転載する。富丘会とは同氏が事務局長をしている旧横浜高商の同窓会である。

田所　昇

大正十二年三月二十日生、高知県
横浜高等商業学校（現横浜国立大学）
昭和二十年六月二十五日、沖縄にて特攻、戦死。
海軍大尉二十二歳

遺　書

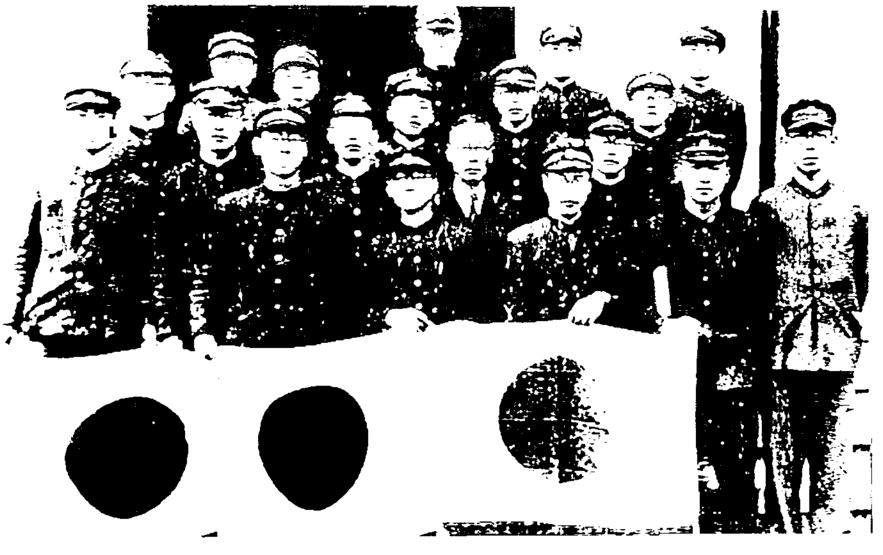
祖国の危機いよいよ瞬前に切迫して参りました。国防の第一線に立つ私達軍人と銃後戦力増強の生産人は、勿論一般国民との区別なく、今や本土決戦となりし現段階に際しましては、最早皆々様と最後の訣別も不可能となりました。で、余暇ある時に遺書を書き置くべきと考えここに筆を執った訳であります。ことに私達搭乗員の任務を考えます時、むしろ今日まで生命を保つことのできたことが不思議なくらいでありまして、いまさら遺書という筋合いでもありませんが、余暇のあるまま書き遺す次第です。

私達搭乗員の本務はご承知の通りでして、空に生き、空に死するのが当然であります。何卒私が散りしとの報到りましたならば、あの高い、そして静かな空に溶けて行ったものだと考えて下さいまして、真先きに仰いで空を見て下さい。そうして戴ければ、私はいつまでもいつまでも母上様の胸の中に生き、よみがえって来ることでしょう。私としては、この未曾有の国難に喜んで軍人としての栄えの死場所に突入してゆくのは、最も光栄あることです。南の空に散華せられた幾多の先輩、同僚の跡を追いゆくは嬉しいことですが、祖国の明るい前途を見納めることが出来ないのがただただ気にかかることです。何卒私の霊前に母上様のお告げ下さる日の一日も早からんことを私はあの世で待っています。

思えば、私は母上様には不孝な子でした。幼い時から悪戯子で、それに高等小学校、中学校と、精神的には非常に母上様をお苦しめ申しあげました。幸にして商業学校時代は安心して喜ばれる程の成績はあげ得ましたことを何よりのご恩返しと思いつつ、心の奥底秘かに嬉しく蔵しています。苦しい家計から私を中学校まで出して戴き、真に有難うございました。心中では感謝しつつも、それを口に出して現すのが何だか恥ずかしいような、照れくさいような気がして今日にまで至りましたが、今となっては、何の邪念もなくただ有難く感謝の念で一杯です。

それから今は亡き小松米治様のご厚志により横浜高商に進ませて戴き、好きな学問に励むことが出来、有為な学生生活を送ることが出来ました。

私の一日も早く成人するのを待っておられる母上様の姿を偲び、私としては努力精進しましたが、いよいよ祖国の急を告ぐるに至り、喜んで海軍航空隊に身を投じました。しかし、ともすれば怠けたい気持ちが生じて私は苦しみました。ことに昨年二月二十八日、父上様が急逝されたとの報を聞きました時、恥ずかしいことながら心中いささか



前列向って右から二人目

の動揺はなきにしも非ずでした。この心の暗黒を救って下さったのは、実に母上様のたびたびのお手紙でした。父上様亡きあとの苦しい家の様子は一言も書かず、ひたすら私を激励して下さった母上様の筆蹟でした。私は母上様の筆の跡を見て忍び励み、自分の本務につとめて来ました。そしてこれから祖国の御為に喜んで突入してゆきます。私が国のために生き、また国のため喜んで悠久の大義に殉ずることが出来ますのも、実に母上様のご尽力によるものです。

私が突入の瞬間、海軍軍人として陛下の万歳を奉唱申しあげ、まだ時間がありますれば、人の子である昇に帰り、母上様の名をよびつつ轟然と体当たりします。そして何も残さず、搭乗員らしい最後を遂げたく思います。

これが母上様の子としての昇の真情であります。これは別にあらたまった、偉いとかいうようなものでもなく、却って恥ずかしいような気がします。そしてあの世で父上様にお会い致し、その後の家の様子等詳しく申し上げましょう。

昨年看護帰省の際、私は家では泣きませんでした。また途中でも何のうろたえもしませんでした。しかし、帰隊致しましてから、寝室で思い切り泣けるだけ泣きました。あれ程心中から泣いたことはありませんでした。このことは今まで誰れにも書いたり話したりしたことはありませんでした。何とぞお笑い下さい。

最後にお願い致したきことが二、三ありますので、次に記して置きます。

一、父上様のお祀りは、今までと同じように、つつましく続けて下さい。いずれ私もお祀りをして貰う立ち場になりますから、よろしくお願いします。

一、祖母さんの看病をくれぐれもお願い致します。私の今日あるは、祖母さんの深い慈愛の光りによるものです。何とぞ昇は喜んで征きましたと祖母さんにお伝え下さい。

一、亡き小松様のお写真を大切にして、私の写真を送りますから、一緒にしてお祀りを頼みます。また姫路の奥様にもたびたび便りをしてお礼を申して下さい。私の死後のとり計らいはご迷惑でしょうが、よろしくお願いします。

一、姉上様には私の代わりになって戴き本当に済まなく思っています。そのため婚期を遅くして何とも云うことが出来ません。何とぞよいところがありましたら、早く縁付けて姉上様にも安心して戴きたく思います。

一、春子、国子、収、弘の四人の弟妹達の今後の指導教育をお願いします。ことに収、弘はただ田所家ばかりでなく、日本の次代の青年なるを思い、立派に、強く、清く、朗らかに、成人させて下さい。なお私の本や高商時代の賞状等は出来るだけ保管し置き、弟達が大きくなった時の勉励の資にでもして戴けば、これに越したことはありません。

一、親類や近所の人々と仲よく暮らして下さい。いずれ私から豊、環、信吉の三人の叔父さんに最後の便りとしてお願いして置きます。が、父上様亡く、また私が亡くなった後、相談相手となって下さるのは親戚の人達より外にはありません。また近所の人々とよく力をあわせ、この未曽有の試煉に耐えて下さい。以上で私の最後のお願いごとは終わりです。

では母上様、いつまでもいつまでもお元気でお暮らし下さい。何も出来ませず不孝の子でしたが、国のために立派に死んでゆきます。次の一首を記してお別れします。

六月七日　　昇　拝

母上様

髪白くめだちて老ひしわが母になすことなくて散りゆく我は

〈随感録〉

母上様

昇はいよいよ出てゆきます。遺書として一通送付致しましたが、二十三年を一期にして私は死んでいきます。

夜半静に死後の家の様子を思います時、実に悲しく涙が出て致し方ありません。

父上様でも生きておられたらと思いますが、それも愚痴です。私の所持金が四百円ぐらいありますから、これを家計の足しにでもして祖母さんの療養費か、弟達の学費にでも使って下さい。

叔父さん達ご一同には、全部最後のお願いをしてそれぞれ一通宛認め送付致して置きましたから、きっとよくやって下さるでしょう。しかしそれを当てにせず、苦しいでしょうが、一同歯をくいしばって耐えて下さい。

私が戦死しますれば大尉となります。また賜金

もあることでしょうから、それで余生をつつましく送って下さい。そして弟の二人を立派な青年に育てて下さい。

なお私の遺骨はありませんから、爪と頭髪を少し送ります。これを遺骨代わりとして父上のお傍に葬って下さい。お願いします。

思えば、いろいろ次から次へと浮んで来て、ともすれば決心がにぶります。私の命日とか、突入しました時間等は、同室の方に通知して下さるよう頼んで置きます故いずれ判明することでしょうが、毎年その日が来ればお祀りをして下さい。私の死後、あまり悲しんだり泣かないで下さい。では弟、妹達をくれぐれもよろしくお願いします。

近所の人々にもよろしく、母校の市商の先生方にも余暇ありました時に、私の最後を報告して下さい。

今日も天草は雨です。高知も今頃は梅雨の頃でつらいことでしょう。

では母ちゃん、永久にお別れ致します。さようなら

母上の子
のぼる

母ちゃんへ

兄を偲ぶ

田所　収（弟）

桧の門柱が一間の幅を保って左右に建ち、門柱から長い塀が左右に延びている。湿気の多い南国土佐だけに、塀は杉坂の表面を火で焼いて腐りにくいように加工してある。

左側の塀から、一本の背高い杉の木がのぞいている。右側の塀からは、寒梅やグイミの木の頭がわずかにのぞいている。門から石畳を五枚ほど奥に入ったところで格子戸の玄関に至る。入って右側も同じ塀で仕切られている。玄関の左側に障子の窓がある。その部屋が戦死した兄「昇」が高知商業学校在学中、自分の部屋として独占していた部屋である。

兄は長男で、次男の私とは歳が十一歳も違い、兄に対する強烈な記憶はあまりない。ただ兄が学校から帰ると、食事と便所以外はその部屋から一歩も外に出なかったことを憶えている。

六畳の部屋の窓際には、医者をしていた祖父から譲り受けた、当時としては立派な机が置いてあった。壁には自分で書いた世界地図や、サソリなど小動物を描いた画が貼ってあった。兄は私たちと違って、文や書画にたけ、和歌、俳句は非常に上手で非の打ちどころがなかった。高知商業学校を一年から五年まで成績は常にトップで、旧制横浜高等商業学校へ無試験で入学したほどである。同じ親から生まれながら、なぜこうも違うものかとよく思ったものである。

学期試験の時など、天井に白墨で英語の単語がびっしり書いてあった。その部屋に私たちが勝手に入りでもするものなら大変である。

ある日、私が不用意に入ったところ、突然両足を持たれて宙吊りにされ、窓からぶら下げられた。柔道初段で、腕力もかなり強かった。

幸い祖母が近くにいて助けてくれたことを憶えている。それ以来、兄の部屋には寄りつかなかった。高知商業学校を卒業する時、母に、

「一番を通すことは実に辛いことだ」

と、初めて弱音を云ったということを聞いている。また、

「横浜高商では二番か三番でよい」

とも云っていたようである。

私が小学校三年（九歳）だった十二月に、その兄は学徒出陣で佐世保に入隊と決まった。戦争中のことであったにもかかわらず、盛大な壮行の宴が二日間も開かれ、各界の人たちや町内の人たちが沢山来てくれた。十一月末、町内会の人たちと一緒に父も高知駅へ兄を送った。

父は帰宅後、風邪を引いたと云って寝込んでしまった。優秀な息子を戦争に取られたことがショックであったのかも知れないが、私は知るよしもない。それ以来、急に気力を落とし、その後、胃癌と云うことが分かり、二月二十七日、兄を送って一月足らずで不帰の人となった。

当時、鈴鹿航空隊にいた兄が、父の死亡の知らせを受けて帰って来た。海軍士官の制服で、腰に短剣を吊っていた。私の目には、実に凛々しく写った。

兄は父の側で二晩寝たように思う。兄は絶対に涙を見せなかった。私にはそれが不思議であった。今になり、兄の遺書でもある日記を読んでいてそのことが分かった。

「家では絶対に泣くまいと突き上げる嗚咽を飲んだ。隊に帰り蒲団の中で一人朝まで泣いた」

と書いてあった。

兄に会ったのが、これが最後である。昭和二十

年敗色濃い六月末、兄は天草から沖縄へ特攻隊として祖国の復興を信じ一身を捧げたのである。

その年の八月十五日、日本は無条件降伏をした。私は兄の死が犬死になったのでは、と一瞬思った。しかし、それは死者に対する冒涜だと思い返した。

私が小学校を卒業して旧制中学校へ進んだ中学一年の五月、兄の遺骨が帰って来た。

ある焼け残った寺で遺骨は引き渡された。

私は、母と一緒に白い布に包まれた白木の箱を首から吊して、兄が勉強に明け暮れた家に帰って来た。近隣の人たちが迎えに来てくれていた。センダンの青葉が痛いほど目に沁みた。

「特別攻撃隊」戦没者名簿の追加と訂正

会員より通知あったものを次の通り公表します

〈追　加〉258頁

殉義隊　少尉　増住弘之　陸士57　大12　ミンドロ島沖　19・12・22

なお遺族は服部直美様（妹）

〒891-01鹿児島市桜ケ丘6－39－9

電〇九九二－65－一三七三

飛行20戦隊　吉川芳流男　茨城　陸士56　大正10　神戸市上空　20・2・4

〈訂　正〉193頁

第三草薙隊　少尉　菊池利夫　宮城　小樽高商13　大12　沖縄周辺　20・4・28

290頁

誠Ⅲ飛行隊　少尉　竹田光興　山口

平成五年度回天会下呂全国大会同行記（六月七日）

副会長　鈴木瞭五郎

気象庁の梅雨入り宣言の発表があった後ではあったが、平成五年度回天会全国大会の挙行される六月七日の前日及び当日は好天に恵まれ、岐阜県下呂温泉の山野の緑は陽光に照り映えていた。この地は人間魚雷回天の発案者黒木博司海軍少佐（海機51期）の故郷であり、墓地のある所でもある。前日の集合の宿湯之島館は皇室も御利用された由緒のある旅館であり、下呂駅の東方山腹にある。そこから少し下った寺に黒木少佐の墓地がある。回天の碑はそこから東南東に入った丘上にあり、そこには平和の塔がそびえ、日本屈指の毘沙門天三体を祀る山王坊の寺院があり、その北側に鎮座する楠公社の背後に回天の碑が建立されている。回天特攻隊員が心の拠り所とした非理法権天の菊水の旗が風になびき、両者の浅からぬ因縁に深い感慨を覚えた。

黒木少佐の御令兄を含む遺族約15名と大津島、光、平生、大神の各回天基地別に全国各地より参集した生存会員約一五〇名は六月六日（日）一七〇〇までに湯之島館に到着、一七三〇記念撮影、終って総会を開催した。物故戦友のみ霊に黙禱し、次いで執行者たる東海回天会長渡辺収一氏（海兵72期）の熱情のこもった挨拶と遺族の個別紹介が行われた。懇親会は元潜水艦隊参謀鳥巣建之助氏（海兵58期）の乾盃で始まり、途中軍歌斉唱で気勢を挙げた。翌六月七日（月）は〇七三〇朝食後、黒木少佐の墓に詣で、〇九三〇旅館を出発、楠公社と回天の碑の前に移動、一〇〇〇軍艦旗掲揚後慰霊祭を挙行して黙禱を捧げた。次いで天王坊本殿に於て昭和19年戦没者50回忌法要、昭和20年戦没者年次法要（読経焼香）を挙行した。一一三〇軍艦旗を降下した後、山王坊修道場において昼食会を開き、懇談と交歓は尽きることなく、一二三〇頃別れを惜しみつつ、散会帰途についた。

特攻隊員の手記

特攻振武45隊　宮之原太吉

> この記事は「少年飛行兵第十三期生の歩み」に掲載されたものである。理事の佐藤彰平氏より提出されたのでここに転載する。

鉾田陸軍教導飛行師団第一教導飛行隊の少飛十三期生の中から

陸軍伍長　北村伊那夫
〃　一口　義男
〃　小川　春雄
〃　宮井　政信
〃　与国　茂
〃　宮之原太吉

以上六名の者が、昭和二十年二月八日を以て第6航空軍第33飛行集団付を命ぜられた。即日鉾田飛行場に於て藤井中尉を隊長とする沖縄作戦のための特別攻撃隊が編成され、一両日中には全員が飛行機の受領も完了した。

中隊の編成は、機種が複座戦闘機（屠龍）であることから各長機の三機については通信員が同乗したが、僚機については操縦者のみとされた。即ち、九機編成で、藤井隊長は中隊長機の後部席にあって指揮し、操縦は各長機の三名が何れも陸士五十七期生、僚機は前記六名の少飛第十三期生という陣容であった。機種が「キ四十五」という名称から中隊の呼称も「振武第45隊」と命名された。

飛行機の整備改装等のためその間鉾田飛行場にとどまることになった。そこで教導隊に残っていた同期が集まりわざわざ六名のための送別会を催してくれた。そのとき、確か小野伍長の作詞作曲だったと記憶しているが、振武隊の歌を作ってくれた。

振武隊の歌

一、先に万朶の桜花
　続いてそびゆる富嶽隊
　次に続くは双襲の
　　その名も猛き振武隊

二、若き紅顔美少年
　つぼみに散るを華となし
　いざや戦友もろ共に
　　九段へ誓う十三期

この歌で送ってくれたのである。私達六名は機会ある毎に肩を組み合ってこの歌を唱い続けたものであった。

最初に知覧基地から特攻隊が沖縄に出撃したのは確か昭和二十年三月下旬ごろであり、その後も連日のように攻撃が続けられた。振武第45隊は既に二月八日に編成されておりながら、鉾田飛行場が空襲を受けるや直ちに栃木県の黒磯に回避命令があり、その後も、待機命令を受けて千葉県の松戸、そして山口県の小月へと転々とし、その間三ケ月有余も待たされた上、五月末になって始めて沖縄攻撃基地の鹿児島県知覧に転進したような次第であった。

或る日、鈴木少尉が「何故出撃命令が仲々降されないのか」と中隊長に質問したことがあったが。特攻隊は次々に編成されており、なるほど後のカラスが先に飛んでいる向きもある。これは、振武第45隊は、夜間訓練が出来ていること、各長機には無線員が同乗していること、更に、特攻訓練として跳飛弾爆撃のほかに大分の海軍航空隊において航空母艦「ホウショウ」を実際に走らせて海空の相互攻撃訓練を一週間ではあるが実施したこと等の点から、然るべき重要作戦に備え、云うなれば取っておきの虎の子にされておるらしいということであった。

従って、五月二十八日の第九次総攻撃には、これまでの生き残りの隊員等含めての混成ながら三十有余機が参加しているが、振武第45隊が先頭切って飛んだのは勿論のことであった。

特攻隊員の心境や行動などについて、戦後になって色々取り沙汰もあるが、不肖私こと、振武第45隊の一員として飛びながら、沖縄を目前にして敵弾を受け海上に墜落し、漂流しているところを島民に救助され一命をとりとめたという体験をしているが、その死に損い野郎として、少なくともその瞬間まで三ケ月の間、共に行動していた隊員のことについては（この日の出撃で小生以外は全員戦死）確信をもってその模様など極く一部ではあるが報告してみたいと思う。

五月二十七日、小月飛行場から知覧基地に転進し、此処で出撃前日の一夜を過したのである。外出はせず三角兵舎に在って身の廻り品の再整理等をしている。自分はお世話になった郷里の村長さん宛に「愈々三途の川のすぐ近くまで参り云々」

等という文章を最後の心境を込めての手紙に書いた記憶が残っている。両親やその他への手紙は既に済んでおり今更書くこともなく、これといって特別することもなかったのである。勿論考えることもなくその必要もなかった。ひたすら攻撃と死を待つ心境であった。

明日の出撃のことすら特別考えるでもなく、「無の心境」と云えば悟り切った様に聞こえるかも知れないが、皆ただ淡々としていたように思う。昭和十六年十月入隊以来の激しい訓練の総決算等の日を迎えようとしている以外に一言では説明の仕様がない胸中であった。お互いに他愛もない面白おかしかったこれまでの想い出の話題等を語り合っていたが、心中は複雑であった。丁度三角兵舎を出たところに築山（池があり小さな橋がかかっていた）があり、そのほとりで幾人かでまん然と腰を降ろしてしばしの時間を過ごした様な記憶がある。その時の会話の内容がはっきり記憶にないのが、今では不思議に思う。

中隊編成直後、大阪の大正飛行場に飛んで此処で爆装（爆弾装着の改装、爆弾は五〇〇kg）をした際、六日間を利用して「それぞれ先祖の墓参りと両親の顔の見おさめをして来い」ということで休暇が出た。その点思い残すこともなく特攻隊員の中では恵まれた方だったと思う。

若冠二十歳そこそことは云え、これまでの教育訓練で培われた精神力もさることながら、特にわが中隊十二名は隊員相互間から生れ出る一つのすばらしいムードがあったように思う。

藤井隊長は妻子のある身で、しかも通信の出身であるのに、「特攻隊こそ軍人の死に場所として至上のものである」という信念に燃えて、わざわざ特攻隊長を志願（複座機であれば後部に乗って指揮が出来る）されたという人である。その奥さんもまた妻子のことで万が一にも心が引かれておくれをとるようなことがあってはそれこそ申し訳ないということで、「一足先に行って貴方様の戦動などお手柄をお待ちしております」という様な意味の遺書を残して、二人の幼な子ともども自決されたということであった。

隊長自身の人柄もあったが、妻子が先に行って待っているということは、人生最大の悲痛であるが、隊長の余りにも淡々とした普段の態度に、隊員も自ら覚悟をかため、隊長と一身同体の心境であった。また、操縦者が陸士の五十七期生と少飛の十三期生で揃っており意思の疎通も良かった。

全く隊長以下の気風は、選ばれた選手がこれからスポーツの試合にでも臨む時のチームの姿とでも云うような心境の半面がのぞいていたことも事実であった。

そして攻撃当日の朝は、隊長以下三角兵舎で午前三時前に呼び起しを受けた。勿論灯火管制下で黒い覆いをかぶり薄暗い裸電球の下で、運ばれて来た最後の朝食をとったのであった。

その晩は、約五時間の就寝時間だったが、ぐっすり寝込んで夢一つ見ることもなかったように思う。

食事は確か浅草のりと生玉子がついたみそ汁の献立であり、それをおいしくというより我武者らに全部平らげたことも覚えている。今になって考えても、当日なんであれ程まで冷静であったのか、まるで鎮静剤でも服んだ時のようなと思われる程までに落着いていた。ほかの者もおそらく同じようなものであったろうと思う。

いよいよ三角兵舎を出て、準備されていたトラックに乗り込み、他の隊の人達と共に、参謀以下見送りの人達の待つ飛行場へと行く。

そこで「攻撃目標は沖縄本島中城湾周辺の敵艦船云々」との命令を聞いたあと、最後に参謀自ら注いで貰った茶碗の中の冷や酒を一気に呑み乾す。

既にエンジンの音を轟かして待っているそれぞれの愛機に向って一斉に走り寄っていったことなど、こうして当時を想い起こしながらペンを走らせておると、四十年前のこととは考えられない新鮮な映像としてまざまざとその模様が頭の中に浮び上ってくるのである。

整備員に一言お礼の言葉を云って握手で最後の別れをしたこと、いよいよ〝車輪止め外せ〟の合図をして、出発の手を振ってスタートを切り、小川伍長と横一文字に並び、長機の鈴木少尉に喰い下るようにして、われおくれじとばかりに砂煙りを蹴上げて編隊離陸で突っ走る。仲々飛行機が浮上しない。それもその筈、二五〇kg二個五〇〇kgの爆弾を抱いて初めてで最後の離陸である。いよいよ飛行場滑走路を一杯に使って場外の防風林をなぎ倒すようにして強引に引き起して離陸して行ったこと等、特にこの日のことは脳裏に焼きついて絶対に忘れることはできない。

わが振武第45隊にあっては、三ケ月有余の待機

期間（この間も訓練を続け、松戸飛行場で夜間飛行訓練の折、中田少尉が着陸に失敗し、後部に乗っていた通信の特幹で坂という候補生を殉職させるというハプニングもあった）があり、

また、黒磯、松戸等では、幾度か民間からの慰問や見送りを受け、色々と知名人の来訪を受けるなどして、常に「生き神様」と呼ばれ、事実それなりの取り扱いを受けた訳であるが、それと同時に自らも国民の期待に報いることに徹する信念に生きる努力をしていたものである。

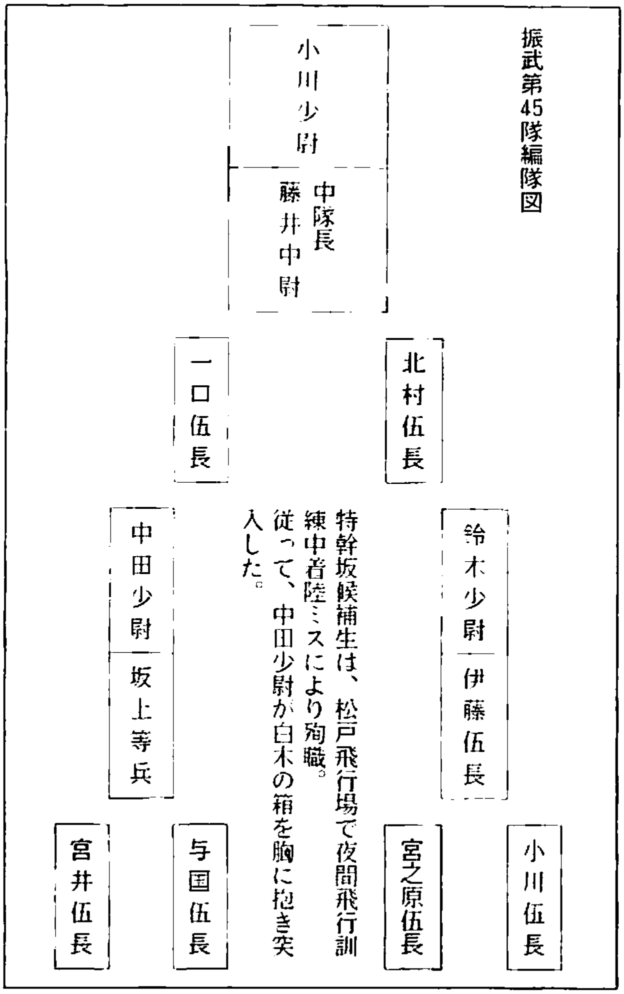
一機一艦の差し違えであれば飛行兵として本懐この上のものはない。即ち、俺一人で相手は二、〇〇〇人乗組の敵の艦船であればと、純粋な気持で確信し、何等疑うことを知らなかったのである。

そして訪れる人達から求められるまま差し出された色紙に、「必殺必中」「断の一字あるのみ」「散る桜残る桜も散る桜」等々のサインをして渡し、或いは、色々と決意の程をこれらの人達と対話することによって、われとわが心にも云い聞かせながら尽忠報国の意志を固めていったものである。

このような話をして見ても、当時の人達で目の前に特攻隊員を送り、或いは、直接対話のあった人ならば理解もして貰えるものと思うが、全く時代の逆転したような昨今の人達では、むしろ理解を求める方が無理なことであろう。

歴史は移り価値観や人生観が一八〇度転回した今の若者はどんな評価をするか知らないが、当時、少年兵は戦争そのものの是非など論ずることは許されもせず、勿論考えようともせず、只ひたすらに聖戦を信奉し、国のため、日本民族のため、ひいては親に対しても最上の孝行であり、兄弟姉妹の良き鑑であった。この信念に徹し、従容として自らの生命をかえりみず突入して行った特攻隊員の尊厳な行為は、何人もおかすことはできないと信ずる。

振武第45隊編隊図



向って右から前列小川少尉，藤井中尉，鈴木少尉，後列北村伍長，宮之原伍長，一口伍長，小川伍長，宮井伍長，与国伍長，伊藤伍長。もう一人中田少尉がいるがこの写真には入っていない。

富嶽特攻隊の出撃
—明鏡止水の境地—

山村卓彦

体当り特攻の魁

昭和十八年初頭の「ガダルカナル撤退」以降、太平洋方面の戦局は〝急坂を転がる〟ように日ごと我が方不利。特に昭和十九年夏のころ、サイパン、グアム・パラオ等を連ねて構築されていた「太平洋の防波堤」が、相次いで米軍に突き崩されるにおよび、我が陸海軍航空当局者の間に、従来の航空戦法だけでは圧倒的な米軍の〝物量〟に対抗すべくもないとの危機感が切実なものとなり、一機一艦、必中必殺の〝体当り攻撃〟に活路を見出すべしとの機運が急速に盛り上がってきた。

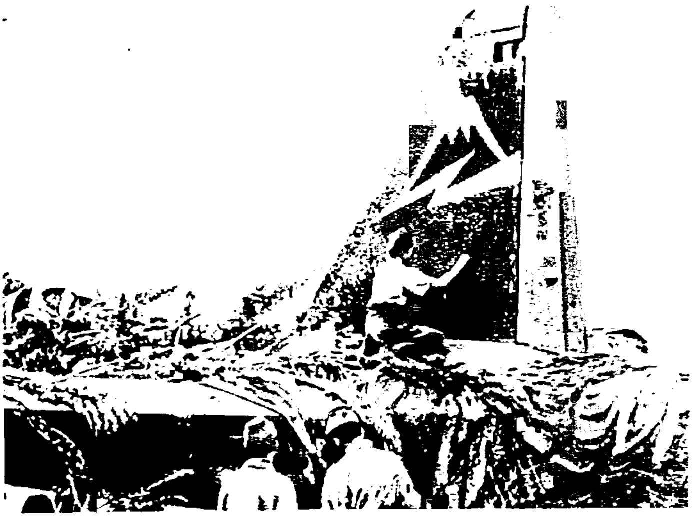
こうして誕生した「艦船特別攻撃隊」のサキガケ（魁）が〝富嶽隊〟である。

富嶽隊は浜松教導飛行師団の隊員から二十六名を選んで編成され、西尾常三郎少佐以下十一名が特攻出撃要員、進藤浩康大尉以下十五名は出撃支援要員と定められた。富嶽隊結成の日は昭和十九年十月二十四日、使用機種は改装四式重爆撃機（符号キ—六七・時速五四〇キロ・八百キロ爆弾2発搭載）で、その比島進出（クラーク基地着）は十月二十九日と記録されている。

決死から必死へ

もともと航空隊の戦闘は常に〝決死〟の覚悟でおこなわれる。昭和十九年末ごろ、レイテ湾在泊の艦船攻撃に任じていた私（山村）たち飛行第七戦隊の全パイロットが、毎日毎夜〝死〟と直面しながら操縦桿を握ったのは勿論である。然し〝決死の覚悟〟は百パーセント〝死〟につながるわけではない。現に私は斯うして読者に語りかけている。

これに対し、特攻隊員は出撃する以上〝必ず死ぬ〟と定まっている。決死と必死の間には大きな差があることを確認して、以下の記事をお読み頂きたい。



特攻機を見送る

昭和十九年十一月十六日払暁、ミンドロ島（ルソン島の真南）周辺の敵艦船を攻撃すべき任務を受けて富嶽隊の複数機がクラーク基地から出撃することになった。その頃私の所属する戦隊（前出）は、同じ基地にいたので、私は寸暇を割いて富嶽隊の出撃を見送ることにした。

富嶽隊の宿舎に私が駈けつけたとき、出撃隊員たち（予備機要員を含め六名ほど）は航空服に身を整えている最中だったが、その部屋の雰囲気に私は吃驚させられた。何時間かの後に迫っている自分たちの〝死〟をおもい、さぞかし重苦しい気分で総ての隊員が表情をこわばらせているだろうとの私の想像は、全く見当外れだったからだ。

出撃隊員たちは、平素と全く変りなく、淡々として、浜松の風景や内地に残った戦友のことなどを話題に談笑している。数日まえ基地に迷い込んで来たという仔犬を抱き上げて頬擦りしている者も見える。

これらの人々は何れも二十歳代の若者で〝血の通った〟生身の人間だ。自分の〝生と死〟に就いて随分悩みもし、苦しみもしただろう。それが今、斯様に明るく振る舞っている。

捨身、尽忠報国一途に徹し、ひとしく〝明鏡止水〟の境地に達したのでもあろうか。

突然、私の目の前の人物の顔がカスンデ見え始めた。私の胸に熱いものが込み上げ、滂沱たる流涕を抑えることが出来なかったからだ。

出撃者と遺稿

聞けば富嶽隊長西尾常三郎少佐は、去る十一月十三日、マニラ東方洋上三〇〇キロほどに在った敵空母群を求めて出撃し、既に散華したとのこと

で、この日（私が見送りに赴いた十二月十六日）出撃するのは石川広中尉機（丸山茂雄伍長同乗）と古沢幸紀曹長機（本谷友雄曹長同乗）の二機であった。

出撃隊員は航空帽の上にキリリと日の丸の鉢巻を締め、見送る整備員たちに笑顔を見せながら機上の人となり、マルコット滑走路東端の出発線に移動した。既に夜は全く明け南国の太陽が眩しい。

離陸滑走のため四式重爆の双発エンジンが全開状態になったとき、遙か北東の空に敵艦載機グラマンらしい機影が二十ほどの黒点として現われ、私たち（出撃を見送る者）は思わずハッと息を呑んだ。その瞬間我が二機は、耳を劈するばかりの轟音を伴って西方遠く飛び去って行った。富嶽隊員は夫々に自分の心境や決意を書き遺し、それらは今日に至るも日本人の心に大きな感動を与え、共感を呼んでいるが、ここでは紙幅の関係上ごく僅かの例を挙げるに止めざるを得ない。

西尾少佐遺詠

数ならぬ　さざれ小石の真心を
積み重ねてぞ国はやすけれ

石川中尉遺稿

喜んで下さい　粘りに粘ります　死のうが一定唯運命
その運命をも支配すべき強力な意志をもて　我行かん　本日特攻の大任を拝し　不肖世にいう五十年の人生を役々汲々とせずして　悠久の大義に生きることを　最大の喜びとす

昭和十九年十月二十五日

（註　筆者は陸士52期当時飛行第七戦隊付）

陸軍海上挺進戦隊 戦没者慰霊小祭

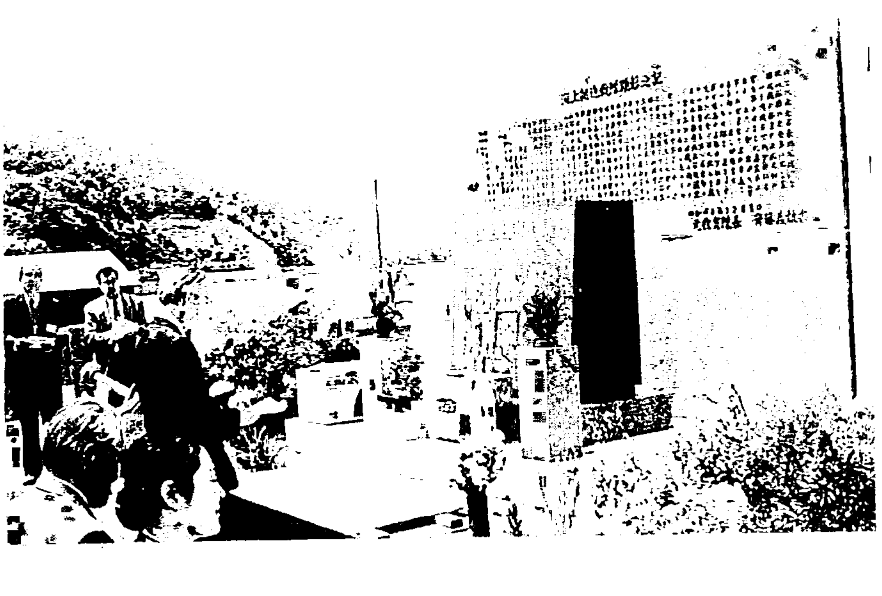
陸軍海上挺進戦隊（通称㋹）の幸之浦慰霊碑は、旧戦隊員及び御遺族の浄財によって、昭和42年12月3日建立除幕式を挙行したものであるが、爾来四年毎に慰霊大祭を、その中間に小祭をとり行って今日迄に到っております。

本年は小祭の年に当りますが、船舶特別幹部候補生戦没者を祀る「若潮の塔」（小豆島）の慰霊祭を11月23日に行うこととなっている為、重複を避け、春に行うことにしました。去る5月11日に、慰霊碑の護持の目的をもって組織された陸軍海上挺進戦隊戦歿者慰霊碑顕彰会役員及び広島県内の旧隊員、関係ご遺族にご案内を出した。心配していた天候も、英霊のお加護か、関係者一同の誠意が天に通じたか、絶好の好天に恵まれて挙行することが出来ました。

この慰霊碑の特色は、㋹関係の戦歿者と併せて、地元幸之浦区出身の大東亜戦争において戦歿された七柱をお祀りしていることであります。又終戦当時第三次の編成で幸之浦で、関東地方への展開に備えて訓練中の十一ケ戦隊の要員と関係本部要員が、原爆投下直後、船舶司令官の命により、訓練を中止して、正に阿鼻叫喚の広島市内の救援作業に従事し、瓦礫と化した焼跡に野宿し、七日間にわたり、死体の火葬作業を行ない、その為に原爆放射能に被曝し、復員後郷里に帰って後、第二次放射能被害とも知らず一命を落した幾多の戦友の霊を、昭和62年の慰霊大祭の際に合祀したことであります。

小祭は関係ご遺族、旧隊員と地元江田島町長を始め、幸之浦区のご遺族の出席を得て、献花方式で取り行われました。

――



飛燕・高島隊
慶良間泊地の米艦隊に突入

森松俊夫

陸士57期生の高島俊三少尉。彼が座間の陸士在校中に私も同校にいたが面識はない。ところが奇しくも彼と同期生で特攻隊長生き残りの堀山久生氏の斡旋により、彼の遺品の大部をお預りすることになり、御縁が生じた。細部は後述する。

特攻の猛訓練

高島は、士官候補生として戦車第24聯隊付であったが、昭和19年4月、陸士卒業時約400名が航空に転科（いわゆる座間転）した。盟友堀山久生・豊島光顕等も一緒である。明野教導飛行師団での教育（乙種学生）を終ると、昭和20年3月末、東京調布飛行場の飛行第244戦隊の第1中隊付となり、早速、三式戦の訓練に入った。中隊長は生野文介大尉（陸航士55期生）だった。

4月26日、飛244作令638号により、第159振武隊長に高島少尉、第160振武隊長に豊島少尉が任命され、これから三式戦〝飛燕〟による艦船攻撃の訓練が東京湾で始まった。

〝と号部隊戦闘教令〟によれば

特攻隊ノ本領ハ　生死ヲ超越シ真ニ捨身必殺ノ精神ト卓越セル戦技トヲ以テ、独自ノ戦闘威力ヲ遺憾ナク発揮シ、航行又ハ泊地ニ於ケル敵艦船艇ニ驀進衝突シ之ヲ必沈シテ、敵ノ企図ヲ覆滅シ全軍戦勝ノ道ヲ開クニアリ

と記されている。

振武隊の攻撃方法は、高度六千m以下で接敵し、ついで超低空に移り敵艦の舷側に体当りし、特攻隊の本領を発揮するのである。しかし、特攻隊はいずれも単座戦闘機に250kg爆弾と落下タンク各一個を機体に抱き込み、知覧飛行場から沖縄本島までおよそ600km（東京から福山間に相当）の間を幾重にも哨戒している米軍邀撃機のなかを潜り抜け、対空砲火を浴びながら敵艦船に突入する辛苦は並大抵のものではない。

高島隊長は、副隊長頼田克己少尉（特操1期）、松原新少尉（特操2期）、伊川要三軍曹（予下7期）西野岩根伍長（少飛15期）、磯部十四男伍長（少飛15期）を部下としてよく掌握し、厳しい訓練に励んだ。

高島少尉は、極めて明朗、剛胆な快男児である。倉敷で大呉服店をやっている実家から軍資金をせびっては新宿の十二辺りに部下を誘い、大いに遊んだものだ。性淡白で金離れ物離れがよく、どこへ行っても、もてもてである。小学生のとき岡山放送局から「面白い話」を放送したことがあるし、基本操縦教育の時代も同期生に落語を聞かせたくらい愉快な男なので、部下からも若い兄として慕われていた。

5月13日、松原少尉の父親が部隊を訪ねたとき、高島少尉は「お父さん、覚悟しておいて下さい。松原少尉の命は私が貰い受けましたからね」と、さらりとした挨拶をし強烈な特攻指揮官の責任と気慨をみせたことがある。

訣別

沖縄の戦局は日増しに苛烈さを加え、陸海軍特攻隊はつぎつぎに出撃し散華した。5月24日、義烈空挺隊が沖縄本島の中飛行場に強行突入、28日、連合艦隊の指揮下を脱した第6航空軍が第9次総攻撃を決行し、海軍は、菊水8号作戦を敢行した。

高島隊と豊島隊は、28日、「先へ行くぞ」と同僚に声を掛け調布飛行場を出発、6月1日、九州の雁之巣飛行場に入った。

高島の両親は、「如何なることが有ろうとも驚ろかぬ様願います。幼年校以来の精神を思う存分発揮します……」という29日付の手紙を受けとり、せめてもにと御馳走を作り、雁之巣に赴いたが、すでに高島隊は知覧に飛び去った後であった。

遺書は、つぎのとおりである。

遺書

皆々様、乱筆テ失礼致シマス　俊三ハ今般第〇〇振武隊長トシテ唯今ヨリ出撃スル事トナリマシタ　神州護持ノ為喜ンテ征キマス　幼年学校入校以来大シタ孝行モセス色々無理ハカリ申シマシタ　何卒御許シ下サイ　既ニ私ノ事ハアキラメテ居ラレルトハ思ヒマスカ　御両親ニ先立ツ不孝ヲ御許シ下サイ

ナアニ思フ存分暴レ廻ッテ子供ノ時カラ良ク言ハレタヤンチャ坊主ノ本領ヲ発揮シテヤリマス呉々モ健康ニ注意シテ私ノ分マテ長生ヲシテ下サイ

園長先生　三木先生　原田　米屋　定金ニ宜敷ク

テハ征キマス

俊三拝

御両親様

皆々様

6月4・5日は天候不良のため、高島隊は知覧に待機していた。調布にいた244戦隊が、知覧に進出していて、五式戦で特攻掩護をやっていた。第一中隊長生野文介大尉は、弟のように可愛がっていた高島少尉らと知覧で会い、思わず落涙したという。生野大尉は、五日敵情偵察の帰途不時着し負傷していた。

5日、高島少尉は、たまたま見送りに来ていた傷夷軍人の馬場行雄氏と昼食を共にしたのち、軍刀や図のうを両親に渡してくれるよう依頼した。そのなかに、芦屋の衛門前で撮った159振武隊の集合写真と、部下隊員の留守宅のアドレスを書いた次の手紙が入っていた。

前途のある若桜を死の道連れにするのは誠に忍びず、父上よりくれぐれもねんごろにお詫び下さるようお願い申し上げます。此の写真を焼増して、右の住所の所に送って下さい。　俊三拝

（後日、高島少尉の父太助氏は、息子の最後の願いどおり丁重な詫状を出され、また遺族の方々からも返信があったとのことである）

決行

6月6日、雨があがった。知覧から159振武隊長高島少尉以下5名、160振武隊長豊島少尉以下3名、165振武隊長枝　幹二少尉以下5名の三式戦13機が出撃した。ところがこのとき一斉に飛び立ったのは11機だという。高島隊は〝飛燕隊〟と言い、磯部伍長は遅れたものの（11日に突入）、5機が美事な編隊で飛去った。固い団結心と高い技倆を示している。

高島少尉は、前日、参謀に呼ばれて粟国島を迂回して敵戦闘機を避けよと言われたが、燃料の関係から直進すると主張しているので、直進コースを計画していたものと思われる。

援護隊は、244戦隊第3中隊付の藤沢浩三中尉（陸航士56期生）の指揮する部隊である。戦闘機は足が短く、沖永良部島付近まで（約450km）しか特攻隊の掩護ができない。

13時30分頃離陸した振武隊は、途中で藤沢隊と別れ、重い爆弾を抱えて、敵のグラマン戦闘機を避けつつ飛行を続けた。敵艦船は、悪天候のため、糸満沖から慶良間泊地に移動していたので飛行目標を慶良間諸島とした。

幸いにも全機揃って慶良間諸島上空に到着、西海面の敵艦船群にたいし、超低空で接近し、「今より突入」の無電を打ち終るや、猛凄い爆発音とともに散華した。

あわてる敵艦の救援を求めるナマの無電が、知覧の通信所に入り、その数は7隻に達した。11機で7隻に体当りとは久々のことであり基地は歓声を挙げ大いに湧いた。藤沢中尉は基地帰還後、振武隊の「全機突入」の電報を聞いたとのことである。米海軍作戦日誌にも、空母ナイトマ・ベイと敷設艦2隻の損傷が記録されている。

この戦果は、ラジオで6月7日朝6時と7時に報道され、毎日新聞（大阪）の6月22・28日に飛燕隊の記事が掲載された。

7月10日、航空総軍司令官河辺正三大将から、159振武隊員にたいし〝武功真ニ抜群ニシテ其ノ忠烈ハ全軍ニ亀鑑タリ〟と、感状が授与せられた。のち二階級特進して陸軍大尉となり、正七位・功三級金鵄勲章、勲五等雙光旭日章を賜わった。

向って右より後列松原少尉、高島少尉、頼田少尉
前列磯部伍長、伊川軍曹、西野伍長

母堂浅子様

　高島少尉に関する記録を作成したのは堀山久生氏である。氏は終戦時は本土決戦用の194振武隊長で館林飛行場にいた。亡き盟友高島少尉を偲び、高島に関する資料を集め、記録を作成して高島の母浅子様に送っていた。さながら実母にたいする如くであり、浅子様も息子俊三に接するような愛情をそそいでおられたのであろう。

　私が初めて浅子様から懇切なお便りを戴いたのは昭和63年10月4日であった。俊三君の生立ちから軍人としての生き様、特攻の様子を詳しく書いてあった。文中に〝茶目坊主が死際に桜の花を咲かせました〟とあり、最後に〝第159振武隊長、二階級特進、陸軍大尉高島俊三の母浅子94歳〟と書かれていた。

　用件は、靖国神社遊就館、知覧遺品館、57期生戦没者を供養する善福寺に納めた以外の高島大尉の遺品全部を偕行社に寄贈するとのことである。以来、幾度かに分けて送られてきた遺品を預り、文通を続けてきた。実に健気な方であったが、平成3年に逝去された。

短信

次の拙歌英霊に捧げます　仙台　小崎　武

もしすめら御軍征かねばアジア史は
　昔に変らじ奴隷のままにて
勝つことのなきこのいくささりながら
　その栄光は永久に朽ちざる

平成五年度
特潜碑顕彰祭行われる

　風薫る五月十五日定刻広島県安芸郡音戸町波多見八幡山神社境内に建つ特潜碑前にて、ご遺族・氏子・会員併せて八十余名の参加のもと盛大に挙行された

　特潜会の運営を離れて氏子総代の皆様の献身的努力により盛んに行われる事は特潜会員として、非常に喜ばしい事である。

　特攻隊慰霊顕彰会よりは鈴木副会長が忙しい中をご参列いただき感謝に堪えません。

　更に本年は元アメリカ海軍潜水艦レッドフィン（SS二七二）乗組のマーチン・シェーファー氏が昭和十八年十月十一日大湊より稚内に進出した水上偵察機の対潜哨戒に引っ掛かり発見されて稚内基地の水偵三機、小樽から増援された二機による延べ十五回に亘る反復攻撃を受けて、沈没したアメリカ潜水艦ワフ（SS二三八）の、調査の為来日して顕彰会に参加されたことは、かつての敵味方が同じ心で英霊の御霊安かれと祈って居ることと推察、大変嬉しい事実として忘れてはならないと感じたものである。

　祭典は氏子総代の開式の辞で始まり、献撰・降神・玉串奉奠（鈴木副会長・前記のシェーファー氏にもお願いした）と続きご神酒の拝受の後同期の桜の合唱、参会者一同の見守る中、軍艦旗降納来年の再会を約し散会した。

（松井　記）

黒潮に逝く

藤野　幸子
福岡市・中学校教員

私は、太平洋戦争で二人の兄を失いました。亡くなったのは二兄が先でしたが、その死を知らされたのは、三兄の道人兄の方が先でした。

戦いもきびしくなってきた昭和二十年の四月半ば、旧満州国（中国東北部）新京又は公主嶺にいたはずの道人兄から、遺書に添えて「内地の八重桜がとてもきれいです」と、めずらしく花に心を托した便りが届きました。それ以来、父は神前にかしわ手を打ち、母は香をたき、私も父母に従って、兄の成功を祈りつづけました。それは、終戦の日がすぎても、なおつづきました。

兄がこの四月に、特別攻撃の途上、敵機と交戦し、黒潮洗う南の島に散っていようとは、私どもは知ろうはずもありませんでした。

20年4月3日　公主嶺出発の前日撮る

兄の遺骨が、父の胸に抱かれて寂しい帰還をしたのは、終戦の年の十月十三日でした。

父は、母と姉妹が見守るなかで、お骨壺のふたをとりました。そして、ただ一言、

「無念であったろう」と語りかけました。

母は、香をたきながら、わなわなとふるえておりました。そして、とても丁重に納められているお骨を見て、

「きっと、心のあたたかい人にお世話になったのでしょう」と、懸命に気をとりなおそうとしておりましたのが、かえって悲しく思われました。

父母は、兄のことについては、それきり黙しつづけて、戦後まもなく他界してしまいました。

歳月は流れて、来年は兄の三十三回忌を迎えるという昭和五十年の六月九日、NHKで放映された旧特攻基地知覧を物語る番組を見ていた私は、出撃直前の特攻隊員の写真に、「もし道人兄ちゃんでは？」と、はげしく心をゆさぶられたのです。

その年の夏、私はNHKの計らいで、知覧（鹿児島県薩摩半島にある町、戦時中特攻隊の基地があり、ここから沖縄に出撃した。）を訪ねることになりました。知覧町援護課で、保管してある沢山の資料の中の出撃者名簿と戦死者名簿の中に、兄の名前をみつけ出した時の驚きと喜び。記者さんと私は、役場の方々にご案内をいただいて、兄や多くの特攻隊員さん達が今生の夢をまどろんだであろう三角兵舎跡、出撃命令が出されたという戦闘指揮所跡、そして、出撃後の状況が正しくは受け取られなかったと思われる通信隊跡などを訪ねました。ほんとうに胸が砕かれる思いの一日でした。この日のことが、NHKのニュースで流されました。

このニュースをご覧になった徳之島町の大田昭也様から「その藤野という特攻隊員は、徳之島上空で敵機と交戦し、近くの海に不時着、戦死した隊員に間違いないと思う」というお知らせがありました。この徳之島からの第一報は、NHKと知覧町役場を経て、鹿児島の宿にいた私に届けられました。うれしいような、恐ろしいような思いが交錯して、体がわなわなと震えて、いつまでも治らなかったことが忘れられません。

その年の十月十日、私は徳之島を訪ねることになりました。福岡――徳之島間の往復航空搭乗券を手に入れました。

兄が、還ることのない片道燃料で、二百五十キロの爆弾を抱いて沖縄までの二時間余りの行程を、どんな思いで飛び立って行ったのかと、その同じコースを飛んでみたかったのでした。

恐怖にも似た不安を抱きながら、黒いリボンで束ねた白一色の花束を持って徳之島空港に降り立った私に、大田さんの奥さんがやさしく声をかけてくださいました。町長様、議長様、新・旧区長様、学校長や先生がた、役場の方々や婦人会の方、青年会の方たちと、数えきれない方々が、

「いつかは遺族の方が訪ねて来られると信じておりました。藤野軍曹と一緒に、三十余年間も待ち続けておりました」と、温くお迎へいただきましたときには、たとえようもなくうれしゅうございました。早速、何台もの車を連ねて、兄の最期の場所にご案内いただきました。

「空中戦は、この地点から北東の沖合約十五キロのトンバラ岩上空で行なわれました。水平線に

白く浮ぶ岩場がそれですよ」

「ほら、そこにブイを浮かしておきました。そこが不時着現場ですよ」

当時、現場の処置に、島の人たちの指揮をとっていただいたという、元区長の福直士（71歳）さんは、指でさしながら説明をしてくださいました。ブイは、浜辺から約五十メートルぐらいの、浅いゆるやかな波間に漂っていました。私は、ふらふらと、ブイが浮いている海に吸い込まれていくような錯覚にかられてしまったのでした。

「まだ機体は、沈んだままですよ」

と、説明を続けてくださる福さんの目にも、島の方たちの頬にも、涙が光っていました。

その夜は、たくさんの島の方たちが集まって、歓迎してくださいました。

「旅団長の高田少将が、遺体の飛行服の胸ポケットから取り出した軍隊手帖を読みあげた。『藤野軍曹』と。この時の衝撃は少年の頃の僕の心に焼きついて、忘れることはできません」

と、口火を切られた大田さんに続いて、このあと、島の人たちは次々と話してくださいました。

「昭和二十年四月二十二日の夕刻、トンバラ岩上空で激しい空中戦が行なわれた。……私たちは、この空中戦を岩かげや草むらに身をひそめ、息をこらして見守っておりました。……黒い機影は、いくつも海に散っていきました。……そのうち、二機が、沖に爆弾を落して、島に向って飛んで来た。……一機はふらふらと海に落ちていった。他の一機は、その場を低空で数回旋回していたが、翼を左右に振りながら、別れにくそうにして、島の西方の飛行場に向って飛んで行きました。……」

「僕が、司令部に連絡に走った」

と、元区長の福さんは少し興奮気味に語られました。

ほかの方たちも、「パッと水しぶきをあげて墜落した飛行機の機首は海中に、尾翼は水面に出て、日の丸が赤くはっきりと見えていた。……旧暦三月十五日で満月のきれいな夜だったが、波は荒れくるっていた。」「早速、駐屯部隊は墜落した飛行兵の捜索を開始した。……私たちは、たいまつを手に捜索活動に協力しました。……山や、岩かげ、民家を明けがたまで捜し回ったが飛行兵の姿は見当らなかった。……何故か飛行機の周辺は詳しく捜されなかった様に思う。……」

「飛行場方面に飛んで行った飛行兵が、夜おそく現場に現れ『クサカ伍長です。捜索をお願いします』と、区長に言い残して去って行った。……」

「翌日午前九時頃から、激しい空襲をうけ母間部落の大半が焼ける大惨事となった。……このため飛行兵の捜索は一たん打ち切られた。……」

「一週間後、僕（現町会議員・吉田義宏氏）と叔父（当時61歳、故人）が海中に潜って、機内に遺体を発見した。……遺体を引き出そうとしたが、手と両足を白い布で飛行機に括りつけてあり、作業はなかなかはかどらない。……この白い布を叔父が鎌で切った。……遺体にロープをかけた。……みんなで浜へ引き上げた。……」

「私（助産婦・中山ノリさん71歳）は、救護処置を手伝った。……軍医の検死が始まった。……軍医は鼻血をふいた。……軍医は、左腕、下腹部、左あごの傷をみとめた。……手と両足は白い布でしばられていた。体当りの際飛行機もろ共という覚悟の上の手だてであったろう。……と」

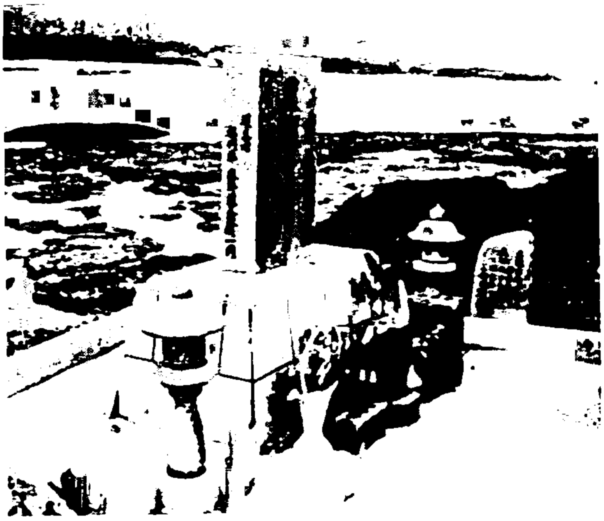
「日の丸の鉢巻には一〇五振武隊第四降魔隊と記されていたように思う。……」

「遺体は戸板一杯の大男であった。みんなで国民学校に運んだ。……通夜は国民学校で行われ、みんな第一喪装で参列した。……遺体は、奉安殿の前に安置されていた。……後藤中尉の読経が始まると、みんなは、こらえきれずに声をころして泣いた。……」

「ダビ（火葬）の準備が始まった。……区長の命令で萱葺高屋根の民家二軒が解体され、私たち女子青年団は、この古材を浜に運んだ。……遺体は、戸板のまま、井げたに高々と積みあぐられた古材の上に静かに置かれた。……午後六時頃点火された。やがて火はあかあかと燃えあがった。……グラマン機が執拗に襲来するので、再三、山や草むらに隠れながら砂をかけては消し、油を注いでは火をたき続けて、翌朝五時頃までかかってようやく荼毘は終った。……後藤中尉の手で、遺骨はしめやかに白木の箱に納められた。……」

まだまだ、さまざまなことを、お互に記憶を確めあいながら、涙ながらに語ってくださいました。私は、島の人々のこの貴重な語らいを、一言一言脳裡に刻み込むように聞き入っておりましたが、なぜか涙はなく、ただうちのめされそうになる自分を見失なうまいと精いっぱいだったように思います。

こうして、ようやく探し求めた兄の終焉の地を訪れることができた私は、その後、姉妹や従兄と何回となく島を訪ねているうちに、今ではもう、



兄が徳之島に永住しているような、そんな気さえするようになりました。

徳之島の方々は、昭和五十四年、この戦跡の浜に、兄をしのぶ慰霊碑を建立してくださったのでした。慰霊碑は、徳之島町長直島秀良様のお筆により『黒潮の塔』と、名づけられました。

少年飛行兵十一期生会からは、兄が、特攻隊員に任命された昭和二十年三月中旬に詠んだ辞世の詩を刻んだ詩碑を黒潮の塔の域に建立してくださったのでした。

辞世　火急を知りて
　馳せ参じ
　我は征くなり
　弥生の空に　特攻出撃を前にして

昭和五十六年五月、多勢の同期生の方々が、黒潮の塔の前で慰霊祭を執り行なってくださいました。その夜は島の人たちと一緒に、夜のふけるまで兄を偲んでくださったのでした。

NHKテレビ、知覧町援護課、徳之島の方がた、少年飛行兵第十一期生の皆様がたと、この一連のつながりで、出撃から戦死に至るまでの顛末を詳しく知ることが出来ました。

私は、兄の遺品箱に共に納められていた数名のお方の手紙を通して、模索しながら次の方々に連絡をとることが出来ました。

昭和二十年四月三日、神武天皇祭を期して、満州、即関東軍から初の特攻隊出撃の際、兄が公主嶺でインタビューをうけたという元満州日報社の記者橋本壮介様（東京都三鷹市在住）。

終戦直後、兄の消息をおたずねいただいた東京陸軍航空学校の同期生で、大刀洗飛行学校、加古川、台湾の飛行隊まで御一緒だったという親友の野曽原逸夫様（広島市在住）。

昭和二十年四月二十二日、知覧を発つ直前、「『元気で出撃した』と、故郷に知らせてくれ」と、兄がこの世で最後に言葉を交したという少年飛行兵第十六期の北田竜太郎様（元整備兵東京北区在住）。この三人のお方から全く驚くほど詳しい情報を頂くことが出来ました。

福岡市出身の柴田信也様（特操一期、元二十四振武隊員、所沢市、故人）は、いつもお力をかしてくださいました。

私は昭和五十七年の夏、柴田様にご案内をいただいて、世田谷観音と防衛研究所を訪ねました。

観音様の台坐に納められている特攻戦死者名簿には兄の名前は見当りませんでした。

防衛研究所の生田惇様にお引き合わせくださいました。生田様から振武隊編成表というい かめしい書類を拝見させていただきました。一〇五振武隊の編成表は昭和二十年五月十五日付で整理済、「軍事機密」「用済後焼却」と記してありました。

この編成表によりますと、兄は、昭和二十年五月十五日現在、徳之島に生存している様に整理されておりました。

兄は、この時点で一〇五振武隊から完全に消されてしまったのです。私は憤りと悲しみで滂沱の涙をどうすることも出来ませんでした。

兄は、昭和二十年三月十八日から四月二日まで公主嶺で特攻のための猛訓練をうけ、昭和二十年四月二日、陸軍特別攻撃隊第一〇五振武隊第四降魔隊員として、公主嶺を出発、内地の菊池、知覧と前進し、昭和二十年四月二十二日午後二時四〇分、知覧から出撃し、徳之島上空で敵機と交戦、不時着戦死したものと判明いたしました。

二十一歳の春に散った兄には妻も子もありません。妹の私は兄の足跡を追い続けました。

「特攻出撃したらしい」としかわからなかった三十余年の空白は、こうして沢山の方々のお力添えですっかり埋つくされました。

いくつもの感動の余韻を残して、兄への私の鎮魂の旅も終わろうとしております。私にも白髪が見え初めてまいりました。

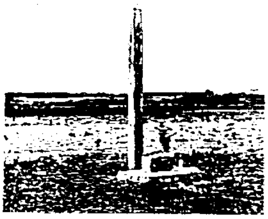
妹たちのかがり火第Ⅲ集
―戦死した兄さんを悼む―
仁木悦子編　角川文庫より
一部抜粋転載

読谷（よみたん）飛行場跡に立ち 義烈空挺隊の遺烈を偲ぶ

全日本空挺同志会
田中賢一

沖縄戦当時北飛行場と呼ばれた読谷飛行場は、嘉手納（中飛行場）よりも規模は大きかった。従って義烈空挺隊の攻撃計画では、北飛行場に八機、中飛行場に四機となっている。現在読谷飛行場の跡は米軍の演習場となっているが、余り使はれていないらしい。風化した滑走路の跡以外は黙認耕作の砂糖黍畑で覆はれている。

義烈空挺隊の慰霊碑は摩文仁慰霊公園の最高処黎明の塔のすぐ下に立っている。この碑は51年に建てたのであるが、それより以前に読谷飛行場跡には、不時着生き残りの人達が建てた「義烈空挺隊玉砕の地」という木柱があった。この附近に永久不変の碑を建てようという意見もあったが、ここでは人目につかないということで、摩文仁の丘に建てた。それがよかったと思う。慰霊といっても我々身近な者が、国に殉じた友に対し抱いている贖罪にも似た気持を満たしているだけでは無意味である。特攻隊員の精神を後世に伝えなければならない。碑を建てるときは人目につくことが第一で、ついで後世の人に分り易く解説したものを刻み込んでおくことが肝要である。そのような訳で摩文仁に建碑したのであるが読谷の木柱も捨て難いので、腐ったら建て替えして現在のものは三



代目である。字も読めなくなってしまった。

義烈空挺隊突入の日（5月24日）に因んで、毎年5月下旬の日曜に、全日本空挺同志会沖縄支部が主催し、摩文仁で碑前祭を行っているが、その前後に一同揃って読谷の碑にも香華を供えている。本年は5月31日に読谷に行った。

往時のこと

読谷の碑に対し合掌すると、摩文仁では得られない感懐を催す。義烈空挺隊が健軍飛行場を発進した後、我が方が知りえたことは次の通りである。義烈隊の中の奥山隊を差出したのは第一挺進団であるが、挺進団長中村大佐は健軍に出向いて作戦準備を指導していた。中村大佐の手記を借りれば

空挺隊との連絡は、行動を秘匿するため、隊長機の無線で、変針時、本島到着、只今突入の三回だけ報告することになっていた。

粗末な臨時の作戦室には、通信所から引き込んだスピーカーが備え付けられ、天井から裸電球がぶら下がっている。第六航空軍参謀長、第一挺進団長、そのほか数名の関係者が、木の椅子に腰掛け、固唾を飲んでいる。軍司令官はこの日鹿屋に飛んで、健軍にはいなかった。

予定の変針時は過ぎ、時計の音のみ空しく響く。《遂に二一五〇変針時は連絡なしに過ぎた。二二〇〇突入の時刻も過ぎてゆく。神仏の加護を叫ぶだけのきびしい至誠と確信、そして終局は、神仏の手にゆだねられた運命への随順と諦観。そして、一切空……

俄然「二二一一只今突入」一瞬大きなスピーカーが仏に見えた。これが義烈空挺隊の最初にして最後の只一回の連絡であった。五月二十四日午後十時十一分、義烈空挺隊の胴体着陸が成功したのである》直ちに次室に控えている報道班員や新聞記者にも伝えられた。ドッと上がる歓声。

二二二五、同行していた第百十戦隊長から「諏訪部隊成功」との報告が入った。

その頃からわが通信所の敵信傍受班は、俄に忙しくなった。敵は火急の場合は生文で放送する。最初に入ったのは二二四五、

「北飛行場異変あり」

義烈空挺隊が到着を報じてから、三十四分後である。その後敵の電波は乱れ飛んだ。

「在空機は着陸するな」

「島外飛行場を利用せよ」

「母艦に着艦せよ」

「母艦の位置知らせ」

「残波岬の九〇度五〇浬に着艦せよ」

蜂の巣を突いたような騒ぎになった。

状況視察任務の重爆は、着陸を報ずる赤信号灯が、北飛行場で四個、中飛行場で二個確認できたと、帰還後報告した。（以上中村大佐の手記と当時の談話）

それから三日後の27日一四一〇に傍受した敵側の無線は、

「強行着陸した日本軍全滅、本日一〇〇〇以降北飛行場の使用支障なし」と放送した。

米軍は伝える

米国で刊行された書物から義烈空挺隊に関するものを拾ってみると、

五月二十四日には、海岸及び沖合の艦船に対する日本軍の来襲は頻繁となった。

二十四日晩、天空は澄み渡り満月で爆撃には最適であった。二〇〇〇空襲警報発令となり、解除になったのは、二四〇〇であった。この間来襲を重ねること七回に及んだ。

第一回来襲の数機は、読谷、嘉手納の飛行場を爆撃し、第三、第四及び第六回目の来襲群も、飛行場に対する投弾に成功した。

第七回目の来襲群は「挺進隊」と呼ぶ双発爆撃機五機からなり、二二三〇頃伊江島方向から低空進入した。対空中隊はこれを要撃し、その四機は、炎上しながら読谷飛行場附近に突入した。

しかし最後の一機は胴体着陸し、読谷飛行場滑走路を、東北から西南に滑走した。

忽ち少なくとも八名の完全武装兵がこの機から躍り出て、滑走路に沿って配置してある飛行機に向って、手榴弾及び焼夷弾をもって攻撃した。

このためコールセイアー二機、C―54輸送機四機、及びプライベーテイア一機が破壊された。その他二六機（リベレーター爆撃機一、カルカット機三、コルセアー機二二機）が損害を被った。

日本軍空挺部隊着陸のため惹起した混乱で、アメリカ兵は戦死二、負傷一八を生じた。二三三八には増援部隊が読谷飛行場に到着し、飛行場勤務部隊を支援し、さらに来襲を予想する空挺部隊に対応する配置についた。

この攻撃のため総計三三機の破壊損傷機を出したほか、ドラム缶六〇〇個分即ち七〇〇〇〇ガロンのガソリンが炎上した。

調査の結果によれば、日本兵一〇名が読谷において戦死し、他の三名は飛行機内に於て対空砲火のため戦死を遂げていた。その他の「突入機」四機には、それぞれ一四名の兵士が搭乗していたが、いずれも炎上した飛行機内に散乱して発見された。遺体の総数は六九を算した。翌日一名の日本兵が残波岬において射殺されたが、おそらく空挺部隊最後の一兵士であったのだろう。

また、別の書物には次のように書いてある。

第五番目の飛行機は、指揮塔から約二五〇〇フィート、東北から西南に伸びた滑走路に胴体着陸した。約一二名の日本兵が無事着陸し、少数の勇敢な者が、いかなる程度のことができるかを実際に示した。

飛行場に置いてあった飛行機が、爆薬により破壊され炎上し始めた。コルセアー三機、第一艦隊飛行団の二機及び輸送機四機が破壊され、その他二九機が損傷を受けた。なお七万ガロンのガソリンが燃やされた。

この日本軍の挺進攻撃によって、想像に絶するような混乱が、基地内に起きた。小銃機関銃火が乱れ飛び、米軍に多数の死傷者を生じた。管制塔勤務のケーレー中尉は負傷後死亡し、他に一八名が負傷した。中には足一本を吹き飛ばされた海兵隊の搭乗員二名を含んでいる。

日本兵は損傷した輸送機に隠れて手榴弾を投げ、これによって一八名のうち四名が負傷した。最後に残った日本兵の一名は、五月二十五日午後零時五十五分、道路から藪に這い込もうとしたとき、米軍に発見され射殺された。合計六九名の日本兵の死体が数えられ、海軍設営隊の手で埋葬された。捕虜になった者は一名もなく、ある者は自殺した。日本軍はこの攻撃で飛行機九機を破壊し、二九機に損傷を与え、日本軍の損害はただの五機であった。もう一つ別の書物には、米軍の混乱ぶりを次のように伝えている。

撃墜されなかった一機は、胴体着陸を強行した。そしてその滑走がまだ停止しないうちに、空挺隊員は飛行機から跳び出して、手榴弾や爆薬を近くにとまっている飛行機に投げ始め、さらにその一帯を小火器で掃射しはじめた。

この全く信ずることのできない突発事と、それに続く混乱の模様を、くわしく書くことはむずかしい。なぜならその大部分は、話から話に伝ってゆくうちに、真実がわからなくなってしまったからである。

我が憶い

木柱をめぐる砂糖黍は微風にそよぎ、往時の阿鼻叫喚のあとはない。親しかった奥山大尉や宇都木中尉（小隊長）は私に語りかけているようだ。

――慰霊など我に恵みを垂れるようなことはしなくてもよい。我々の精神を確かと後世に語り伝えておけ――と。

特攻随想（第二話）

理事　上坂　康

電撃作戦の魔力

昭和一五（一九四〇）年、日本では「紀元は二千六百年」という奉祝歌を歌っていたころ、英本国では未曽有の国難に見舞われていた。

その前年の九月一日、ナチス・ドイツ軍がポーランド侵略を開始すると、翌々日の九月三日に英仏は対独宣戦を布告した。しかしそれから七か月間はPhoney War（まやかしの戦争）と呼ばれるほど小競り合いしかなく、西部戦線は異状なかった。

ところが、一九四〇年四月にノルウエーを席捲したドイツ軍は、五月十日にベルギーへ進入し、マジノ線とジークフリード線の永久要塞陣地を無力化して、フランスへ乱入したのであった。

連合軍も奮戦したが、ドイツ軍の「ブリッツクリーグ（略してブリッツ）」、といわれた電撃作戦には歯が立たなかったのである。空挺部隊、機甲部隊、急降下爆撃隊などを縦横に駆使したこのナチス軍の快進撃は正に目を見はるものがあり、これに一目ぼれしたのが日本の軍部であった。日本を大東亜戦争に駆り立てたのは「バスに乗り遅れるな」という合言葉であり、その直接の動因はこのナチス鉄血軍の電撃作戦であったといわれている。

地獄の撤退作戦

ドイツの機甲兵団によって分断された英軍は、五月二十六日に「ダイナモ作戦」を発動し、ダンケルクからイングランドへの「地獄の撤退」を開始したのであった。

このような連合軍の大惨敗と英軍の本国撤退は予測されなかったので、大量の海上輸送便の急速な確保設定がおぼつかなかった。なにしろ三十万を越す英仏軍将兵が続々とダンケルクに後退集結しようとしており、その最後尾、すなわち最前線の部隊は、味方の撤退の時をかせぐため、ドイツ軍の進撃を食い止めようと、必死の防戦抵抗に努めていたのであった。

ダンケルクからイングランド南岸までの最短距離は約四〇海里（約七四km）しかないが、海軍艦船だけでピストン輸送していたのでは追い付かない。ついに英軍は、公私を問わぬあらゆる可動船舶の動員徴用に踏み切ったのであった。

ヴォランティアは集まれ

ドーヴァー海峡に面した英国南部の海岸には、セント・マーガレット湾やフォークストーンなど、良好な港湾がある。小さな漁船の舟だまりやヨットハーバーになっている入江も少なくない。

一九四〇年五月二十七日、その入江の一つに駆逐艦が一隻入って来た。珍しいことがあるものだと人々が見ていると、同艦は投錨することなく、その場回頭をして出船の体勢になった。そして駆逐艦の艦上スピーカは次のように放送した。

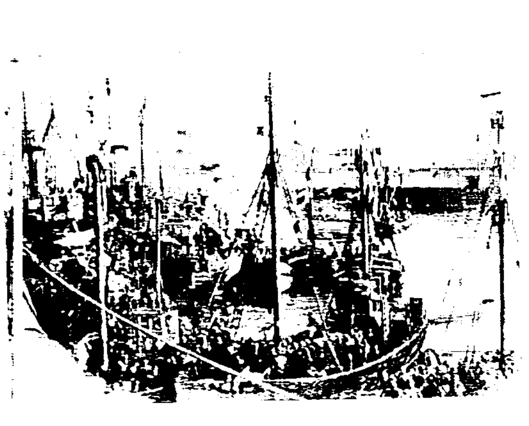
「皆さん、よく聞いてもらいたい。わが軍は目下ダンケルクで苦戦中である。本艦は今からこれを救出に行く。一緒に行くvolunteer（有志）は直ちに集まれ。」

この拡声器の声は、狭い入江のすみずみまで響いた。すると、戦禍を避けて出漁を控えていた漁船が続々と駆逐艦の近くに集まってきた。クルージングヨットもレジャーボートも、動力を持った船は殆ど集まってきた。すると駆逐艦のスピーカーは"Follow me."（われに従え）と告げて入江を出港し、その後に続いて民船船団がドーヴァー海峡をダンケルクに向かって航進し始めたのである。

ダンケルクに行ってくるからネ

それは駆逐艦が放送してから三十分足らずの間のできごとであった。

ある漁夫はその放送を居間で聞いた。その妻君は台所で聞いた。漁夫は細君に「じゃあちょっとダンケルクに行ってくるからネ」と言った。すると



撤退する兵士を満載して英本土に辿りついた民間の船。

妻君は「あなた、気を付けて下さいよ」とだけ言って送り出した。私が先の大戦中の最大の美談の一つと認めて常に引用するのは、日本の特攻と英国のこの話である。

この漁夫は、フランス戦線で連合軍が敗退していることは知っていたろうが、ダンケルクの戦況がどうなっているのか知る由もなかったに違いない。そこに突然の駆逐艦からの放送である。いかに自国軍を救出に行くためとはいえ、自分も危険にさらされることは必定である。自己の生命も身分も保障がないのに、ヴォランティアとして自発的に戦場に馳せ参じるというのは、よほどの勇気と祖国愛と海軍に対する信頼がなければできることではない。

しかもこの漁夫は即座にダンケルク行きを決意し、その奥さんもこれが永別になるかもしれないのに健気に主人を送り出している。私はこれら軍人ではない英国人の「地獄の撤退」海上輸送協力に対する即応を、わが特攻敢行にも比すべきものとして高く評価したいのである。

英空軍の特攻

私はかねて懇意の英国大使館付海軍武官 A.P. Masterton-Smith 大佐に、過日次の二つの質問をした。

その一つは、ダンケルクからの撤退に自発的に協力したような英国人は、今でもたくさんいるのであろうかということであった。これに対して大佐はいろいろと言われたが、結論として、一九四〇年から半世紀の間の英国の変化は大きかったけれども、英国人は一般に保守的であるから、その国民性がそんなに大きく変ったとは思われない。ということはもし一九四〇年のダンケルクと同じ状況が再び起きたら、今でも英国人は立ち上ってくれると期待できるのではあるまいか、ということであった。ここに私が今でも英国民を尊敬する理由がある。

その第二の質問は Battle of Britain（英本土航空戦・一九四〇年）の際、英空軍の戦闘機はドイツの爆撃機に、体当たり攻撃を実施したのではないかということであった。この質問をするのには訳があった。

私は昭和二九年に海上自衛隊に入隊して間もなく、学校かどこかで、バトル・オブ・ブリテンにおける前記の話を聞いた覚えがある。ところが平成五年五月一八日、世田谷特攻平和観音の月次法要に参列した際、鈴木暸五郎（特攻隊慰霊顕彰会）副会長は、この話について、英空軍戦闘機もナチの侵攻から祖国を守るという大目的達成のため、特攻を断行したのであろうと言われた。

私はこの話を「特攻」誌に寄稿するため、海上自衛隊幹部学校時代の教え子・北沢法隆氏（防衛研究所戦史部所員）からバトル・オブ・ブリテンに関する図書七冊を借りて調べたが、前記のような史実はどこにも書いてなかった。そこで親しいマスタートン・スミス大佐にお尋ねすることになった訳である。

おわりに

この英海軍武官は、イギリス戦闘機がドイツ爆撃機と衝突したという話は知っているが、それらは「特攻」と呼ぶようなものではなかった、と強く否定された。しかしその戦史に詳しい空軍武官 Alan N. Mac Gregor 大佐を紹介するから、会って確認するよう勧められた。

私は平成五年六月二九日、マッグレガー空軍大佐と英国大使館でお会いした。しかし紙面の都合で、この話は次回に譲ることにする。

最後に、皆さんが最も関心を持っておられるであろうことについて一言しよう。それは、一九四〇年五月二七日から六月四日までの九日間に、約八五〇隻の大小艦船舟艇が三三万八、二二六人の英仏将兵をダンケルクから英本国に輸送した。これは奇蹟的な成功であった。

それではドイツ空軍はどうしていたのであろうか。五月二七日と六月一日には、英駆逐艦三隻と他の艦船七隻が撃沈されたが、うんかのごとく集まった英民船にはほとんど被害がなかった。なぜならば、延べ二、七三九機の英戦闘機が出撃して、三三二機の損害は出したが、一、二八四機のドイツ機を撃墜したからである。

私は今でもこの話が語り継がれている英国を、うらやましく思っているのである。

（隊友会東京都支部連合会副会長）

第六潜水艇員（佐久間艇長）遺徳顕彰式典に参列した。英国海軍武官マスタートン・スミス大佐と筆者（平成5年4月15日、呉市鯛ノ宮にて）

特攻艦隊留魂碑が防府市江泊山中腹に建立され、4月3日に除幕式が行はれた。

〈碑　文〉

母なる海の記

眼下の三田尻沖は曽て聯合艦隊が度々集結した海軍ゆかりの泊地である。

第二次大戦末期の昭和二十年四月六日、戦艦「大和」以下十隻から成る「海上特攻隊」は、沖縄に来攻した連合国軍を迎え撃つべくこの母なる海を抜錨、翌七日奄美徳之島北方海域において五百余機の敵艦上機群と戦い、第二艦隊司令長官伊藤整一大将以下三千七百二一八名の将兵が壮烈なる戦死を遂げた。

この沖合一帯はまた「回天特攻」で戦没あるいは殉職した百三十八名の若人が大津島、光、平生をそれぞれ基地として、日夜決死の体当り訓練に励んだ聖なる海である。

これらの人々の願いは自らの命に替えて祖国と同胞の恒急の安泰を購うことであった。大厦の傾覆は一木を以て支うる能はず、戦局の挽回はついに成らなかったが、今日の日本が未曽有の平和と繁栄を築き得た根底には、このように高貴な犠牲的精神と行動が在ったことを我々は深く心に銘記せねばならない。

平成五年四月

平成五年度震洋慰霊祭に参拝して

副会長　鈴木瞭五郎

日本列島が好天に恵まれ、陽光に新緑が照り映えている中、五月十五日（土）、「嗚呼特殊潜航艇の碑」の顕彰祭が行はれこれに参加したが、特潜会から記事が出ているので省略する。

翌五月十六日には平成五年度震洋慰霊祭が長崎県川棚町の特攻殉国の碑の前で執行された。全国各地から参集した遺族（約二十名）、戦友（約一八〇名）のほか、海上自衛隊からは佐世保総監（代理幕僚長）が儀仗隊を連れて参拝され、地元は町長はじめ支援団体が心からの歓待を提供された。式は軍艦旗掲揚の下に始まり、国歌の斉唱後、遺族による献灯、献花が行われ、相田特攻殉国の碑保存会長及び川棚町長により切々たる追悼の辞が奉読されて特攻烈士の死は諸民族の植民地開放自主独立の実現によりその目的を達成したことが強調され感銘を新らたにした。次いで海上自衛隊から花輪奉呈と儀仗隊による弔銃三斉射による拝礼が行われ、硝煙にかすむ往戦時を偲んだ。終って参拝者はそれぞれの思いを込めて菊花を霊前に供えて拝礼し、軍歌を高らかに斉唱して御神酒を頂いて後再会を期して散会の途についた。この慰霊祭は再来年の平成七年度に全国大会が挙行される由。

万世特攻慰霊碑並びに加世田市平和祈念館落成式

理事長　最上貞雄

去る5月23日12時より鹿児島県加世田市にある、万世特攻碑前にて第22回慰霊祭が厳粛盛大に執り行われた。

全国各地よりご遺族を始め関係者約千名が参列され、さすがに加世田市長陸士61期の吉峰良二様が音頭をとられ、市が全面的に後援されておるだけに極めて盛大であった。

陸士、特操、少飛各代表者が切々と胸を打つ追悼の言葉が捧げられ、ご遺族の嗚咽の声があちらこちらより洩れ聞えてきた。

かねてより遺品館建設の話が進み、全国に募金を呼びかけておりましたが、やっと完成され慰霊祭に引続き万世特攻遺品館が新な名称「加世田市平和祈念館」として落成披露された。鉄筋コンクリート二階建て延床面積八一八㎡で一階には加世田沖で引揚られた零戦の機体が波形のコンクリートの上に安置され二階は関係特攻戦没者の遺影、遺書、遺品等が展示され、拝覧者に強い感銘を与えていた。鹿児島方面にお出の節は知覧同様是非ご覧いただきたいと思います（本件紙面の都合で写真等割愛、次号に掲載します）